

令和 6 年 9 月 27 日現在

機関番号：24501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01025

研究課題名（和文）近代インドにおける装身品と嗜好品：国内市場志向型低価格商品の勃興とその模造的文脈

研究課題名（英文）Ornaments and Articles of Taste in Modern India: Rise of Low-priced Goods in Domestic Market and the Context of Imitation

研究代表者

大石 高志（Oishi, Takashi）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：70347516

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題「近代インドにおける装身品と嗜好品：国内市場志向型低価格商品の勃興とその模造的文脈」では、植民地期のインドで主に中下層の人々の自立化もしくは社会経済的な上昇志向に対応する形で需要と消費が増大した低価格消費財、特に装身品や嗜好品に焦点を当てながら、同時代の社会変動を読み解く作業を行った。特に、それらの低価格商品（日本からの低価格帯の輸入品も中核的な商品群として含まれる）が、従来の在来の高価品や西欧からの高額な輸入品との間に帯同した差異性や模造性を析出することで、そうした中下層の人々が有した文化的伝統やナショナリズムとの間の両義的な関係性や反エリート主義を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

植民地期インドにおいては、新たな就業機会の獲得や小規模な蓄財・土地保有などにより、低コストや農業労働者の中に社会経済的な上昇志向や自立化が生じたことが指摘されてきたが、そうした社会変動に伴う拮抗や確執が最も具体的な形で顕著になったのが、装身品などを筆頭とする消費財の商品群であった。中下層の人々の新しい消費が、既存の社会的規範や文化的表象との間に、どのように反発を喚起したり、折り合いを付けて調整されたりしたかを分析することは、社会変動の本質的な部分を学術的に理解することになる。また、社会変動と消費の接続性に関するこうした分析は、現在のインドに延長的に適用することも可能な現代性も有している。

研究成果の概要（英文）：The research project ‘Ornaments and Articles of Taste in Modern India: Rise of Low-priced Goods in Domestic Market and the Context of Imitation’ focused on low-priced consumer goods whose demand and consumption increased in response to the growing socio-economic upward mobility of the lower-middle class population in colonial India. The research was thereby undertaken to analyse the broad social changes of the period. In particular, by analysing the differentiation and imitation between these low-priced goods (including low-priced imports from Japan) and traditionally high-valued/authorized goods or expensive imports from Western Europe, the ambivalent relationship toward the cultural traditions and nationalism on the part of these lower-middle class people were analysed.

研究分野：近代インド社会経済史

キーワード：植民地期インド 装身品 嗜好品 アジア間貿易 模造 廉価品 嗜好品 中下層民

1. 研究開始当初の背景

本研究「近代インドにおける装身品と嗜好品：国内市場志向型低価格商品の勃興とその模造的な文脈」(2020～2023年度)の起点もしくは基盤的な視点は、大石自身が「近代インドの社会動態と日本製輸出雑貨との連関：模倣・模造・差別化の中の装身品」『社会経済史学』82巻3号、2016年11月(11-34頁)で、硝子(ガラス)製の装身具や香水・香油用小瓶の消費・流通の検証を通じて提示した、戦前日本からインドへの様々な軽工業製品雑貨と植民地期インドの社会経済的動態との間の連関的関係である。この探求の背景には、日本の南アジア研究の先達から、事実上、継承した中長期的な研究の履歴や系譜がある。

つまり、柳澤悠は、1980年代から、水島司などとともに、南インドの特定の農村地域に関する定点観測的な土地所有や農業労働に関する長期歴史的な実証研究を推し進め、その長年の研究成果の1つとして、農業労働者などの土地なし層や低カーストの人々など、農村部の中下層民において、イギリス植民地期の100～150年間の間に、土地保有の漸増や都市部就労(出稼ぎを含む)の移動性などに伴う経済的上昇が生じ、大きな意味で、植民地下における中下層の自立化や自立化傾向が生じたことを明らかにした。この大きな学問的検証は、柳澤によって、独立後の現代インドにまで長期的に続くものとして措定され、中下層の人々が、食品や衣料などの消費において新しい選択を示すようになってきた歴史的経緯を示唆するに至っていた。

本課題研究は、こうした先行研究の系譜と示唆の上に、19世後半～20世紀前半の植民地期インドにおける低価格帯商品の台頭と中下層の自立化との連関について、自身が若手であった頃より、杉原薫などの「アジア間貿易」の歴史的展開に関する研究との交流の中で、継続的に手掛けてきた商品の消費とそれを手掛けた商人・起業家のネットワークの分析を軸として接合させながら探求に取り組むものとして開始された。

2. 研究の目的

本研究では、イギリス植民地期の近代インドで、とくに1890年代～1940年代に掛けて台頭した国内市場志向型の低価格商品について、とくに、中下層の人々の自立化とその消費の動態との関連のなかで検証することを目的とした。とくに、その際、低価格物品の中でも、装身・装飾品や嗜好品に焦点を当てながら、旧来の正統的・伝統的な高価・高額物品との間に、追従、差別化など、どのような関係性が、表象されたり、埋め込まれたりしていたか分析することを目指した。

なかでも、本研究で焦点に据えたのは、「模造性」という文脈であった。これは、自身の論稿「近代インドの社会動態と日本製輸出雑貨との連関：模倣・模造・差別化の中の装身品」『社会経済史学』(2016年)で新しく中心的な視座に措定したもので、中下層の人々が自立化を徐々に進めていく歴史過程の中で、社会、経済、政治的な制約や環境との関係性のなか、西欧からの輸入品も含めた高額品やインドの正統・伝統的な高価物品への単純な模倣・追従でもなく、直線的な反発や差別化でもない、大きく言えば、「模造的」な文脈での商品・物品の志向性が顕著になることが、1つの重要な消費上の特性であったという点である。

具体的には、以下の様な社会的環境や文脈を踏まえながら、この「模造性」を理解していくことを構想した。

- ・社会的顕示性を踏まえた消費渴望と現実の経済的制約
- ・反エリート主義やエリート層への揶揄
- ・カーストに伴う所持・携行品に関する社会的制約や制裁
- ・反英ナショナリズムの台頭とイギリス製品購買への規制/回避

3. 研究の方法

統計資料による商品/物品の措定

本研究では、植民地期インドで中下層の人々の自立化を「消費」という形で背負うことになった商品や物品の具体的な学問的探求と措定が、前提となった。そのため、輸出入や国内物流を含めた流通関係や製造関係の同時代の統計資料を、可能な限り使用して、特定の物品/商品の台頭を数値的な客観性のなかに析出し裏付ける作業を行った。

植民地期インドに輸入された日本製品

本研究遂行者の大石は、本研究課題の補助金を受託する以前から、明治後期から1930年代まで、日本(とくに神戸/大阪地域)からインドやアジア諸地域に輸出されていた軽工業製品雑貨を積極的に研究の射程に収めてきた。こうした軽工業製品雑貨は、従来の研究で、「粗製乱造」的な廉価性への過剰な傾斜や第一次世界大戦期における欧米商品流通の間隙を利用した「非主体的」な伸長などの面で捉えられることもあったが、その重要性は、実は、輸出先のインド/アジアにおける廉価商品市場の台頭や拡大という社会経済的文脈である。

本研究では、中心的課題として、植民地期インドの中下層の人々の自立化と結び付いた装身品や携行品を扱ったが、その相当部分は、同時代の日本から輸入されていた商品、もしくは、そうした輸入品をインドで輸入代替していった国産の物品であった。このため、本研究で、そうした日本からのインド向け輸出製品も重点的に扱った。また、付言すると、本研究の期間は、ちょうど、コロナ禍で海外渡航への制限が大きかったことも、こうした日本製品を具体的な研究・分析対象として扱う比重を高めた。

商家/製造事業者の一次史料の渉猟

本研究課題の遂行者の大石は、元々、インド人の商人や起業家のネットワークを歴史的に解明する研究に従事していた。本研究課題においても、商人や起業家は、インド人の中下層の消費動向やその社会性に細やかに反応して機敏に物流や製造を創り出す存在として、留意していた。このため、今回の研究でも、こうした商家や起業家、その一次史料の渉猟に、相当の注力を行った。この結果、今回の研究課題に密接に関係する販売促進用広告媒体を含むインド人商家の史料や、インド向けの輸出傘柄を手掛けていた日本側の製造事業者の史料などを見つけることができた。

4. 研究成果

本研究期間を通じて、下にそれぞれ取り上げる幾つかの商品・物品について、具体的に、同時代のインドにおける中下層の人々の消費と結び付けてその動向を位置づけ、さらに、その「模造性」についても一定の理解を導くことができた。研究成果としての学会や研究会、さらに学会誌等での研究成果の発表・公開の詳細については、今回の「研究成果報告書」に含まれるリストで確認できるよう、記載した。

傘柄

本研究期間中、顕著に研究を進捗させることができた物品・商品の1つは、1890年代以降、日本から英領インドに大量に輸出された洋傘およびその部分品としての傘柄である。この傘および傘柄について、本研究において、近代インドの市場での傘をめぐる政治・社会性とその動向を、中下層の人々の上昇・自立化志向、反英ナショナリズムや国産品振興運動、インド市場へ傘や傘部分品を提供した日本滞留のインド人商人、さらに、近畿地方の山林の木材資源を傘の柄に加工・製造した日本人業者の役割など、歴史的に検証することができた。自身の学会報告の1つとして「戦前の近畿地方の山林とインドでの洋傘の製造・流通業：木材資源の活用と市場との接合」社会経済史学会第93回全国大会（2024年5月11日）、東京都立大学（『社会経済史学会第93回全国大会報告要旨』52-53頁に要旨掲載）をあげることができる。

近世期まで、インドで、傘は、王権や社会的上層性と結び付いて優れて儀礼的な性格を帯びた物品だったが、植民地下のインドで、西欧から輸入された洋傘が同時代の植民地エリートのインド人に、雨傘や日よけ傘としての一定の近代的実用性を帯びた上級品として普及していった。自立化傾向をもった中下層の人々の傘やその所持への志向は、こうしたエリート層への追従/模倣と、イギリス由来の高価品への揶揄/差別化という2つのベクトルを併せ持つ両義性を孕みつつ、結果として、日本製もしくは日本製部品を使用した廉価でありながら一定の趣向性をもった洋傘というものに、帰着していったと考えられることを、本研究で明らかにした。

また、とくに傘柄に関する研究では、傘柄製造において木材資源の選定や確保、加工などを担った近畿地方の山間森林地や山地外縁部での木工業者の役割を、過渡的ながら明らかにしつつある。大阪の製造問屋や神戸のインド人輸出商などへ傘柄を提供していたと措定される日本人業者の事業帳簿類を渉猟することができており、今後も、そうした一次資料の分析を進める予定である。現段階で明らかにして学会報告などに含めている点を記す。近畿地方の山林では、明治後期（1900年代頃）には、ヒノキなどの針葉樹材や硬質な特定の広葉樹材、さらに、特定種の竹を選定して、積極的に傘の柄が製造されるようになっていた。それらは、山地部に部分的に残存していた木地師的な伝統や、新たに普及し始めていた曲木の技法なども利用して加工された。これらの工程を担うようになった山間地や山地外縁の商工業者は、大阪や神戸の問屋や輸出業者と結び付き、インド/アジアの市場に対応した加工を施したが、特に、間伐材や下枝材、端材などの有効利用や複数の事業所の広域的なネットワークの構築により、様々な樹種木材品の提供可能性の実現や各地の森林資源の育成状況に応じた柔軟な伐出などを可能にしていたと考えられる。また、これらは、様々な樹種素材に手作業工程による独自の加工やデザインなどを施した趣向性の高い多様な製品を低廉な価格帯で提供することを実現し、インド市場で主に中下層の人々の需要に結びつくことを可能にした。

マッチ（燐寸）

マッチ（燐寸）は、1890年代-1930年代のインドで、急激な価格低下とそれに伴う使用の普及が生じた商品の代表的な存在で、タバコの喫煙・消費や家庭内の日常調理などへの派生的影響も大きかった。また、インド市場で先行した欧州からの輸入マッチに後発の日本からの廉価マッチが介入しながら、市場と使用が広がった経緯もある。研究遂行者の大石は、こうした歴史的重要性や日本との関係性もあり、20年間以上に渡って、マッチを研究対象にしてきた。

本研究課題の期間内には、そうした日本製マッチの台頭と廉価性を解明する意図から、軸木や小箱の原料となる木材資源の研究を進めた。具体的には、学会報告「日本/アジアのマッチ工業の発展過程における環境史的文脈：木材資源との関係を中心にして」社会経済史学会 第 92 回全国大会（2023 年 5 月 27 日）、九州大学・西南学院大学（同学会編『報告要旨』82 - 83 頁に要旨掲載）で、北海道、沿海州やシベリアなどの諸地域の領土化や植民地化と、特定の有用樹種の確保についてプロセスの解明と数量的な理解を進めた。

また、「周辺」で結び付く：兵庫県中西部地域のマッチ製造業と華商/インド人との接合」パネル「アジアの中の神戸と華僑華人：マッチ産業と商人ネットワークの多様性」、日本華僑華人学会、2023 年度第 21 回年次研究大会、2023 年 10 月 29 日、神戸（同学会編『要旨集』28 頁に要旨掲載）では、兵庫県のなかで、神戸市域の大手製造業者ではなく、むしろ播磨地域というマッチ製造業の「周縁」的地域の中規模製造業者が、神戸などに滞留していたインド人や中国人の輸出商人にとって、輸出マッチの提供元として機能していた重要な地域であったことを、事業者の台帳記録などの分析により明らかにした。このことは、そうした「周縁」地域の比較的安価で安定的な労働力が、日本製輸出マッチの廉価性の 1 つの前提であることを示している。

干し魚/塩魚

19 世紀後半から 20 世紀初めに、急速に、インドや環インド洋の諸地域で、急速に干し魚/塩魚が普及した歴史的事実がある。これは、元々は、イギリスの主導したモーリシャス、ナタール、セイロンなどの地域のインド人の年季契約移民労働者への配給食として提供された干し魚/塩魚が、次第に、廉価で、一定期間の保存可能な便宜性を有する庶民の食糧品として、さらに波及したことによる。本研究課題の期間中、学会報告「環インド洋地域における干魚/塩魚の流通：19 世紀中葉以降におけるインド人移民労働者への配給を起点とした変化」日本南アジア学会 第 36 回全国大会、2023 年 9 月 24 日、神戸大学（同学会編『報告要旨集』68 頁に要旨掲載）を行い、こうした普及を支えた中下層民の消費や、原材料の魚や塩の提供・確保について検証した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大石高志・曾士才	4. 巻 87巻2号
2. 論文標題 近現代横浜・神戸における移民の多様性：その類似点と相違点	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会経済史学	6. 最初と最後の頁 155-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20624/sehs.87.2_155	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大石高志	4. 巻 事典項目
2. 論文標題 印僑（事典項目）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会経済史学事典	6. 最初と最後の頁 444-445
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石高志	4. 巻 21
2. 論文標題 「周辺」で結び付く：兵庫県中西部地域のマッチ製造業者と華商/インド人商人との接合	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 華僑華人研究（日本華僑華人学会）	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大石高志	
2. 発表標題 近代インドにおける傘をめぐる社会経済的動態と日本の介入	
3. 学会等名 日本南アジア学会 第35回全国大会（帝京大学、2022年9月25日） 要旨：『日本南アジア学会第35回全国大会報告要旨集』24頁掲載。	
4. 発表年 2022年	

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 海浜歴史社会学への射程：瀬戸内海地域、環インド洋地域、イギリス
3. 学会等名 海浜歴史社会学研究会 第1回研究会（兵庫県立明石公園会議室、2022年8月3日）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 近代アジアにおける手工芸品をめぐる交錯：植民地期インドにおける日本製品の介入を手掛かりとして
3. 学会等名 神戸華僑華人研究会 第201回例会（中華会館（神戸市）、2023年2月4日） 要旨：『通訊』第95号2023年3月、9 - 10頁掲載。
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 造船・漁業・港湾業と船員・漁民・荷役労働者：海浜歴史社会学への試み
3. 学会等名 海浜歴史社会学研究会 第2回研究会（アンカー神戸、2023年2月17日）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 日本/アジアのマッチ工業の発展過程における環境史的文脈：木材資源との関係を中心にして
3. 学会等名 社会経済史学会 第92回全国大会（西南学院大学・九州大学、2023年5月27-28日）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 植民地期インドにおける「小さな政府」と教育：富裕名望家層（商人含む）の寄付金拠出をめぐる比較地域研究の試み
3. 学会等名 科学研究費補助金「中印比較史の創生：データベースに基づく総合的研究」（村上衛代表）研究会（京都大学人文科学研究所、2022年9月17日）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Takashi OISHI
2. 発表標題 "Indian Merchants and the "Small Governments" in India and Abroad, 1858-1947"
3. 学会等名 世界経済史会議第19回会議WEHC（パリ、2022年7月28日）、Resource Distribution in the Mega-states with Small Governments: A Comparison between China and India、科研基盤A「中印比較史の創生」（村上衛）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 英領インド期中央州における農林工関係：ピーリー製造業の台頭に伴う動態に即して
3. 学会等名 人間文化研究機構「南アジア地域研究」京都大学中心拠点研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 移民を通じた接続ゲインの歴史的諸相：環インド洋地域と環太平洋地域
3. 学会等名 「近現代における環インド洋熱帯地域の複数発展経路」（日本学術振興会 科研費：脇村孝平）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 日本製雑貨とインドの市場/社会：戦前のガラス製品などの検証から見通す親和性と接続性
3. 学会等名 京大アジア・アフリカ塾2024 「存在感を示す巨象・インド：アカデミアの立場から見た多様性と可能性」（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 「周辺」で結び付く：兵庫県中西部地域のマッチ製造業と華商/インド人との接合
3. 学会等名 日本華僑華人学会、2023年度第21回年次研究大会（神戸）、パネル「アジアの中の神戸と華僑華人：マッチ産業と商人ネットワークの多様性」2023年10月29日 同学会編『要旨集』28頁に要旨掲載
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 環インド洋地域における干魚/塩魚の流通：19世紀中葉以降におけるインド人移民労働者への配給を起点とした変化
3. 学会等名 日本南アジア学会 第36回全国大会（神戸大学） 同学会編『報告要旨集』68頁に要旨掲載 2023年9月24日
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 戦前の神戸における外国人船員の来訪と寄留：インドや中国などアジア出身者と日本人船員との接点
3. 学会等名 神戸華僑華人研究会 第208回例会、テーマ「広域アジアの移動性と帝国主義」、2024年6月8日、神戸中華総商会KCCビル
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 大石高志
2. 発表標題 戦前の近畿地方の山林とインドでの洋傘の製造・流通業：木材資源の活用と市場との接合
3. 学会等名 社会経済史学会第93回全国大会、東京都立大学南大沢キャンパス 『社会経済史学会 第93回全国大会報告要旨』52 - 53頁に要旨掲載
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藤田幸一・大石高志・小茄子川歩編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 人間文化研究機構 ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「南アジア地域研究」、京都大学中心拠点・研究グループ1	5. 総ページ数 192
3. 書名 『南アジアの人口・資源・環境』、大石担当章「近現代インドにおける市場経済化と資源・環境：開放性と多様性の再編」	

1. 著者名 社会経済史学会編	4. 発行年 2021年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 746
3. 書名 社会経済史学事典（事典項目「印僑」2頁分：444 445）	

1. 著者名 神戸市外国語大学総務グループ&大石 高志 編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 神戸市外国語大学	5. 総ページ数 26
3. 書名 外大×SDGs：グローバル社会の中のチャレンジと課題ー2023ー（デジタルブックレット）、大石担当章「インドの粘板岩（スレート）加工業：児童労働を含む労働者環境の課題を焦点にして」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

神戸市外国語大学 大石高志
<https://www.kobe-cufs.ac.jp/institute/faculty/oishi.html>
リサーチマップ
<https://researchmap.jp/read0083541>
神戸市HP：神戸市外大の学生・教員が作成したSDGsデジタルブックレットの公開
<https://www.city.kobe.lg.jp/a95287/562783323267.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------